

## <シリーズ・授業と生徒を語る>

### 「ぐんま教育のつどい」を振り返って

前橋清陵高校 坂田尚之

私は2007年度から2009年度までの3年間、群馬県高等学校教職員組合(略称・高教組)の教育文化部長(教文部長)として、「ぐんま教育のつどい」(県教研＝県教育研究集会)に携わってきました。教文部長1年目のときには9条の会の小森陽一さんをお招きして講演を行いました。教文部長の独断で決めてしまったことを反省して2年目からは5～7名のスタッフからなる教文専門委員会の中で協議検討して決めて行くことにしました。その時私の中に引っかかっていたのが「教育実践の羅針盤」と「私たちの学校づくりプラン」という二つ、これが欲しいということでした。

私が教文部長に就いたとき、私は最後の職場になるであろう現任校での3年目で2年生の担任でした。大半の生徒が不登校経験や経済困難をはじめ様々な困難を抱えていたけれど、HR活動や生徒会行事、部活動などを通して少しずつ学校に居場所を作り始め、私自身もHR以外に生徒会や文化発表会の指導も含め慌しくもそれなりに充実した日々を過ごしていました。しかし、それにしても、何でこんなに大変な状況の生徒たちがこんなに大勢いるのか？ どうしてこんな状況が起こっているのか？ この学校は一体どういう位置付けになっているのか？・・・？の渦でした。私たち現場の教職員は目の前の生徒たちを何とかしようとして精一杯取り組んでいましたが、しかし、対応に追われているというのが実情だし、学校としてどういう方向をめざそうという共通理解が明確にあるわけではありません。だから、一生懸命毎日取り組んでいるけれども一体どうしたらいいんだろう、というのが大方の心ある教職員の本音だし、どういう風に学校をつくって行ったらいいんだろうというのが私の頭の中のくすぶりでした。そんな状況のときに「つどい」づくりを始めた私の思いを言葉にしたのが先の二つの言葉です。

2年目の教文専門委員会は充実した学習会でした。私と同じような疑問や悩みを抱いていたスタッフの中で、「つどい」のテーマはどのようなものにしたら良いか何度も繰り返し議論を行い、紆余曲折を経てたどり着いたのが「授業」です。かつても取り上げたことはありますが、私たちは「これでイイのか私の授業!？」と授業のあり方そのものを問い直す挑発的な全体集会としたのです。この問い直しのきっかけとなったのが“協働学習”という授業実践を行っている新座高校の金子奨氏の『学びをつむぐ』(大月書店)という本で、金子氏に模擬授業をしてもらいました。

従来から生徒のための授業づくりは実践されてきましたが、金子氏の実践は生徒

の発言する姿が誰からも見えるように教室全体では机をコの字に配置し、さらに生徒同士で対話・討論を深めるために4人ごと机を向かい合わせてグループを組む、というように目に見える授業の形を「デザイン」している所に特徴があります。これは佐藤学氏の「学びの共同体」の提唱の流れを汲むもので、その形にばかり目が行きそうになりますが、その本質の一つは教材の精選、特に発問にあると私は考えています。そして、いかに生徒のひそやかな発言を引き取りつなぐか、ここに最大の本質があるのだらうと思います。そうして初めて生徒は自分の頭で考え始め、他の生徒の発言を聞いて自分の思考が深まっていく、本当の「学び」が始まるのだらうと思うからです。

しかし、授業内容の自主編成も行われてきたし、私も熱心に教材研究をしてきましたが、生徒の思考と発言をつなぐ事がなかなかできないのはなぜでしょう。変えなければならぬ授業に対する教師の認識があるのではないのでしょうか。フロアからの「教室の王様的な先生がまだ多くいます」という保護者の発言が強く印象に残っています。私などは確かに、ひげらかすつもりはないけれど、一所懸命に調べた項目ほどたくさん説明してしまいます。だから、教師はあまりしゃべらない、と金子氏は釘をさしていました。

また、教文専門委員会のまとめの会議の中で「金子氏の授業は教師の想定している答えを要求しているのではないと感じたから入りやすいと思った」という趣旨の指摘も重要だと感じました。私たちの授業は往々にして教師の誘導になりやすく、それは知識や考え方の注入か押し付けになってしまい、生徒の発言の意欲を殺してしまうからです。さらに、このことは「答えは一つだけ」という学び方で良いのか、と言う重大な問題提起を含んでいると考えられます。

私は理科の教師ですが、「理科嫌い」と言われ始めたずいぶん以前に大学受験志向の注入型授業のあり方に、「それはいくら分かりやすく授業をしても専門家になるわけではない大部分の生徒たちにとって必要な授業となっていないだらうと」疑問を抱き始めました。本当に生徒にとって必要な授業をするためには、「生徒一人ひとりの学びに目を向けた」教材・授業となっているかと常に問い返し授業づくりを行うこと、これが「つどい」づくりから得た私の「教育実践の羅針盤」です。そして、もう一つ私が手に入れた「私たちの学校づくりの指針」と言える重要な活動、それは3年目に取り上げたテーマ「生徒を語る授業検討会」です。「生徒一人ひとりに学びのある授業」を実践する力は、互いに授業を見合い、生徒の様子を同僚と語り合うことにより付くでしょう。自分の授業を客観的に検討でき、複数の目ならば一人では見えない生徒の学びの様子まで目を向けることができるからです。みんなして生徒のことを語り合うことが本当の学校づくりの根本ではないかと感じています。